

今から十何年か前ですが、由有子が不登校になった体験があるんです。その頃はまだ不登校ということばもない位、めずらしいことだったんです。家は六人家族です。父親（夫）と私と長女由有子と、その下に三人子供がいます。皆もう大きくなっています。その頃由有子は中学二年で、学校に行きたくなくなっちゃったんです。そのうち行くだろうと思っていましたら、そのうち本当に休みだして、ずっと休みでしたのです。

私はさつきずいぶん立派なことを言いましたけれども、賢治がどうかとか、……でも本当に子供が休みだしちゃうと、とても心配です。このままずっと学校に行かなくなったらどうしよう、就職できるのかしら、学力つくかしら、先行き生きてゆけるかしら、と思います。あたりまえですね、父親も心配していました。子供も、自分だって心配なんです。そして学校の先生も心配して下さって、お友達も訪ねて下さったりするんですけども、それがまた、子供にとっては重荷になるんです。「あなたダメね」「ダメよ」と言われているような気がするんです。でも実際、私もダメだと思っていました。どうかなってほしいと思うんですけども、でも行けないし、だらしなないことしていると見

えるし、ダメよとどこかで思っているんですね。するとそれは子供にどこかで通じているから子供はますますもう味方は誰もいませんから、二年間、三年近くですが、あとになつて聞きましたら、地獄の泥沼に首まで漬かつて動けないような状況だったようです。

### 親の苦しみと決意

昼間はずっと寝ているんですね、夜になって私たちが寝る頃起きてきて、絵をかいたり下に降りてきてゴソゴソ何かやったりしているんです。私も色々な所に相談しにいきました。学校でも色々紹介してもらって行っただけですけども、どこへ行っても皆言うことは違っているんです。子供さん、甘やかしすぎですか、お母さんの育てかたが悪かったとか、いやお父さんが仕事でいつも家にいないからこうなっただけですよとか、それからこれは子供に生まれつき欠陥がありますとか、それからあなたの家は甘やかしていて居心地がいいから学校へ行かないんだとか、四人兄弟だからほったらかしだからい

けないのだとか、すぐく色々言われるんです。皆意見がちがついて、でも考えてみると皆どれも当たっているようだし、なるほどと思っただけですが。

結局のところ、私の結論、私と主人の結論では、自分たちの育てた子供だから責任は自分たちにあるだろうと。人さまに重荷をおしつけるようなことはしないで、何とか自分たちの手で、覚悟を決めて考えようじゃないかというのが結論でした。それで、家でずっとみていたんです。人様からみれば、何もしないでただ放置してあると見えたでしょうが、まあ親としてはやれることはやり、苦しみ考えた上での結論だったのです。

### 声かけで自力で立ちあがる

でも娘があんまり日陰の家の中ばかりにいるものから、少し庭に出てお日さまにあたった方がいいよって言ったんです。でもなかなか出ないんです。それでも私が庭仕事で外に出て何かやり出すと、少しだけ娘も庭に出るようになったのです。そうやって

いて、ポツポツと庭へ出るようになりました。すると外は気持ちがいいのでしょね、だんだん慣れてきてだんだん外にいる時間が長くなつたんです。後になって娘に聞くと、ずっと草の中に座って、雲をみていたり、草の中を歩いていく蟻をみていたりバツタと遊んだり、花と話をしたりしていたそうです。

娘の話によると、植物たちは話しかけると必ずこたえてくれる、ことばではないけれど、いつもいつもやさしいことばで、こんな私を傷つけることは一度もなかったと。本当の友達。だから一番居心地がいいところだったようです。自然と本当に会話していたんですね。

### 娘の変化と私の気づき

そうしましたら、しばらくして、娘の生活が変わってきちゃったのです。どういふうにかというとうと、例えば家にゴキブリなど出ますと、そつとつかまえて庭へ連れていく

んです。ゴキブリは庭でも生きられるからと。蟻などが物にたかっていると、私がほうきなどでパツパツと掃こうとするものなら大変です。ケガするでしょって。物がなくなるまでそつとしておけばいなくなるよと言うんです。それから食べ物も変わったんです。ベジタリアンになっちゃったんです。お魚なんか焼いていると「痛そう」と言うんです。これはもう主人はお魚好きですから「そんなこといったら食べられないよ」と主人の方も言います。娘は生き物は食べられなくなりました。牛や豚やお魚もみんな家の猫や犬や兄弟と同じになっちゃったんですね。

私はそうして考えたんです。私も宮沢賢治の万物皆兄弟というところが本当だと思いやつてきましたが、肉や魚も食べていました。元々それ程肉や魚は食べていませんでしたが、でも平気で食べていたんです。賢治はきつと食べられなかったでしょうね。皆友だちだったらやつぱり食べられないだろうなと、娘の姿を目のあたりにして、賢治さんの気持ちもやつと少しわかったのです。

そして私はハッと気がついたのです。娘はこんなダメでみすばらしい格好をしてポロポロに見えるんですけど、実はすごくきれいな心が芽生えているのではないかと。そう思ったら、突然とても立派な人に見えてきて、何でこれ気付かなかったんだろう。生命を大切に一番大切な心を持っているじゃない。私はこれまでこの心が大切と思つて生きてきたけれども、もしこれが真実なら、この「心」は現実に力があるものだろうと。これを生かして育てていったら、まだ今は弱いけれども、必ずや生きていけるはずだ。これにかけよう。もし世の中の言うように生きていけないとしたら、これは私の信じているものも娘の信じているものもちがつていたことになるだろう、そうしたら一生を棒に振るんだろうなと思つたんです。でも娘はそう生きようとしている、それならば私も応援しようよと、そう思つたんです。そうして主人もやはり応援しようよというかたちになつていったのです。心をまっすぐに育てることにかけてよと思つたのです。

## 子供たちの変化と長女の才能開花